

# ケア × アート

# いき いき

CARE×ART IKI IKI HOSPITAL 2

# ホスピタル

平成 26 年度文化庁助成 [大学を活用した文化芸術推進事業] 筑波大学プログラム報告書

「適応的エキスパート」としてのアートマネジメント人材の育成

—病院を活用した多様空間・異分野協働によるアートマネジメント能力の向上に向けて—

BEYOND MUSEUMS : ARTS MANAGEMENT PROGRAMS IN A MEDICAL ENVIRONMENT SUPPORTED BY ARTISTS, DESIGNERS AND CURATORS





# ケア ×アート いき

CARE×ART IKI IKI HOSPITAL 2

# いきホスピタル

平成 26 年度文化庁助成 [大学を活用した文化芸術推進事業] 筑波大学プログラム報告書

「適応的エキスパート」としてのアートマネジメント人材の育成

—病院を活用した多様空間・異分野協働によるアートマネジメント能力の向上に向けて—

BEYOND MUSEUMS : ARTS MANAGEMENT PROGRAMS IN A MEDICAL ENVIRONMENT SUPPORTED BY ARTISTS, DESIGNERS AND CURATORS

# 2

03…… ごあいさつ Introduction

04…… 事業概要 About

## 05 1 継続する病院アートプログラム Continuing Hospital Art Program

06…… アート&デザインプロデュース Art & Design Produce

08…… アーティスト・イン・ホスピタル Artist in Hospital

10…… アートプロジェクトチーム アスパラガス The Art Project Team "Asparagus"

12…… デザインプロジェクトチーム パプリカ The Design Project Team "Paprika"

13…… 小児科ゴブリンワークショップ Goblin Themed Workshop at the Pediatrics Ward

14…… 筑波大学附属病院前ガーデンプロジェクト University of Tsukuba Hospital Garden Project

## 21 2 病院アートコーディネーターの仕事 The Work of a Hospital Art Coordinator

22…… 筑波大学附属病院アートコーディネーターの1年と1日

A Typical Schedule of Art Coordinator at University of Tsukuba Hospital

24…… 筑波メディカルセンター病院アートコーディネーターの1年と1日

A Typical Schedule of Art & Design Coordinator at Tsukuba Medical Center Hospital

## 27 3 広がる病院アートプログラム Extension Art in Hospital Programs

28…… スーパー・ナチュラル・ガーデン／NNUH The Supernatural Garden at NNUH

30…… ワークショップ「空ゴブリン」／阪南病院 "Sky Goblin" Workshop at Hannan Hospital

32…… 「ゴブリン博士の病院ゴブリン」アーカイブ展 "Hospital Goblin by Dr. Goblin" Archive Exhibition

33…… 展覧会「芸術支援展 ケア×アート I —筑波大学における病院アート活動のあゆみ」  
Exhibition "Care × Art I —Art in Hospital at the University of Tsukuba"

35…… 展覧会「病院ゴブリン博士展—ケア×アートII」 "Dr. Goblin in Hospital —Care × Art II" Exhibition

## 37 4 ケア×アート レクチャー Lecture of Care × Art

38…… 林容子／医療・福祉におけるアートの役割と効果 認知症の方とその家族のための対話型鑑賞プログラム

Yoko Hayashi / The Role and Efficacy of Art for Medical Care and Well-being -A Dialogue Based Art Appreciation Program for those with Dementia and their Families-

40…… 高橋伸行／ケアにとってアートとは何かを考える～『やさしい美術プロジェクト』の実践から

Nobuyuki Takahashi / Reflection on the Art for Caring from the Hospital Art Project "the Yasashii Bijutsu"

42…… 花村周寛／まなごしのデザイン Chikahiro Hanamura / Designing for the Perspective

43…… ミヤザキケンスケ／ミヤケンのアートプロジェクト Kensuke Miyazaki / MIYAKEN Art Project

44…… ブランウェン・グイリム／芸術と健康 Bronwen Gwillim / Designing for Health

45…… 大久保シェリル ほか／アートセラピー Cheryl Lyn Okubo / Art Therapy for Health

46…… 齊藤泰嘉／手をつなぐ医療と芸術 Yasuyoshi Saito / Caring and Art : Hand in Hand

47…… 活動一覧&広報

48…… 奥付

## ごあいさつ

この報告書は、平成26年度文化庁助成筑波大学プログラム「『適応的エキスパート』としてのアート・マネジメント人材の育成－病院を活用した多様空間・異分野協働によるアート・マネジメント能力の向上に向けて－」の活動記録をまとめたものです。本プログラムは、美術館だけでなく、病院や図書館など広く社会生活の現場で人々と向き合い、アートの力によって心豊かな暮らしの実現を目指すアート・マネジメント人材の育成を目指すものです。

このプログラムは、昨年度より継続して行っているものであり、今年度は、病院のアートコーディネーター、美術館の学芸員に加えて図書館の司書とも連携してアート・マネジメント人材の育成につとめました。また、英国の病院でのプログラム実施など国際性のある活動も行いました。

本書は4章構成となっており、第1章は筑波大学附属病院並びに筑波メディカルセンター病院で続いてきたアートプログラムの実践、第2章は病院アートコーディネーターの仕事、第3章は筑波大学から国内外に広がる病院でのアートプログラム、第4章は専門家による講演の記録という内容になっております。この報告書が、今後のアート・マネジメント人材の育成に活用されることがあれば大変嬉しく存じます。

本事業への助成を賜った文化庁、ならびに協力を賜った英国ノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院、英国イーストアングリア大学、筑波メディカルセンター病院、茨城県つくば美術館、筑波大学附属病院、病院のアートを育てる会議、筑波大学体育・芸術図書館ほか関係者各位に対し、この場を借りてお礼申し上げます。

平成27(2015)年3月

筑波大学芸術専門学群芸術支援コース担当 本プログラム事務局担当  
芸術系教授 齊藤泰嘉

筑波大学で病院のアートが生まれたのは2002年。芸術系教員が、筑波大学附属病院や近隣の筑波メディカルセンター病院を拠点とし、アート・デザインによる療養環境改善に主眼を置いた医療支援活動を始めたのが契機となっている。以降、筑波大学芸術では、さまざまな分野の教員と学生が、両病院にて活動を展開してきた。本書では、2013年度の報告書に続き、複数の医療施設や公共施設で展開された内容やアートコーディネーターの実践に着目して活動を紹介する。

#### ■筑波大学芸術専門学群

教育課程=以下、4専攻、15領域から成る

芸術学専攻(美術史コース、芸術支援コース)、美術専攻(洋画コース、日本画コース、彫塑コース、書コース、特別カリキュラム版画)、構成専攻(総合造形領域、クラフト領域、構成領域、ビジュアルデザイン領域)、デザイン専攻(情報デザイン領域、プロダクトデザイン領域、環境デザイン領域、建築デザイン領域)  
(2014年現在)

#### ■筑波大学附属病院

病床数=800床  
外来患者数=1,530人/日  
入院患者数=661人/日  
平均在院日数=15.2日  
救急車搬送件数=1,864人  
(2012年度実績数)

#### ■筑波大学メディカルセンター病院

病床数=413床  
外来患者数=505人/日  
入院患者数=370人/日  
平均在院日数=12.6日  
救急車搬送件数=5,124件  
(2012年度実績数)

前年度に引き続き、  
成長したゴブリンが  
「いきいきホスピタル」を  
紹介していくよ!

\*ゴブリン……いたずら好きの妖精



## 【事業概要】

「適応的エキスパート」としてのアートマネジメント人材の育成  
—病院を活用した多様空間・異分野協働によるアートマネジメント能力の向上に向けて—

1. この事業は、文化庁からの補助金(平成26年度文化芸術振興費補助金[大学を活用した文化芸術推進事業])により、筑波大学芸術組織(芸術系、芸術専門学群等)が、筑波大学附属病院、筑波メディカルセンター病院、茨城県つくば美術館、英国イーストアングリア大学、英国ノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院等と協力して行うアートマネジメント人材育成プログラムである。
2. この事業は、美術館はもとより、病院をはじめ多様な空間においてアート&デザインを展開できる、企画力・応用力・実行力のある「適応的エキスパート」としてのマネジメント人材の育成を目的としている。
3. この事業は、病院における芸術受容に関する特性を把握し、アート&デザインの企画・作品制作・展示・運営・広報などに関する実地研修を通じて、専門の人材を養成するカリキュラムを開発・実施する。その後、他の大学・病院・美術館・各種関連施設において応用展開できるプログラムとして普及させる。

※本書に掲載された各冊書きは、事業実施当時のものである。

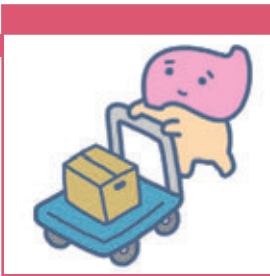
# 1

## 継続する病院アートプログラムの実践

### Continuing Hospital Art Program

筑波大学附属病院や、筑波メディカルセンター病院でのアートプログラムを紹介。絵画やワークショップ、空間改修などさまざまな分野のプログラムを、現場のスタッフと協働しながら行い、実践力を身につけた。





# アート&デザインプロデュース

## Art & Design Produce

Project

洋画、書、総合造形、情報デザイン、建築デザインの各領域がそれぞれに取り組む筑波大学附属病院でのプロジェクト。毎月一度、附属病院にて行われる「病院のアートを育てる会議」にて、芸術側と病院側の協議を行いながら進めている。

### ▶ 洋画領域

病院に展示されることを前提に3名の作家に制作を依頼。洋画2点、版画2点の作品が病院に提供された。写真は小野修平「輝く夜に」（銅版画、27×50cm）。小さな植物たちが放つ生命力をテーマに描かれた。

担当教員＝仏山輝美／制作＝藍原亜美、小野修平、城山萌々



### ◀ 書領域

洋画と同じく、病院の渡り廊下の展示や特別室への展示をふまえ、書道を専門とする7名の作家にそれぞれ1点ずつの制作を依頼した。左は椎名正悟「漢詩一種」。右は鈴木吉貴「臨子漁罟」。「子漁」という銘文が鑄込まれた殷時代の青銅器があり、それを臨書（模写）したものの。

担当教員＝菅野智明／制作＝椎名正悟、鈴木吉貴、野坂千夏、深田香菜子、堀越智博、山口真末、山口由希菜



### ▶ 情報デザイン領域

昨年度より続いている実験植物園の写真展示。今年度も継続して季節毎に展示替えを行った。写真は「春の筑波実験植物園」（展示期間：2014年4月26日～7月25日）。往来の多い1階の廊下での展示ということもあり、患者・職員ともに好評である。

担当教員＝木村浩／デザイン・制作＝楊陽、李冠群、王琦

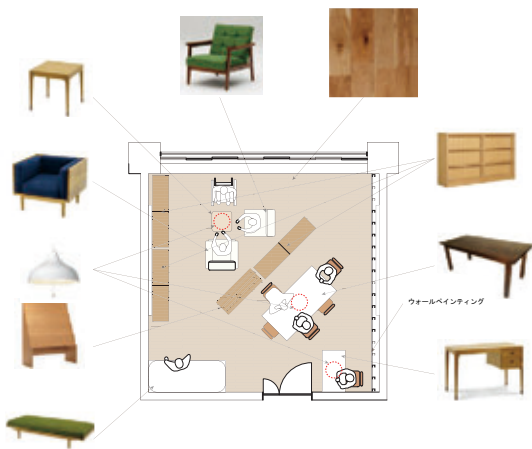




## ▼ 建築デザイン領域

患者図書館の開設に向けたデザインの提案を行った。利用者が心地良く本とともに過ごせる図書空間を目指し、附属病院の旧病棟の病室を家具や床を中心に改修する。来年度に完成予定。

担当教員＝貝島桃代／デザイン・制作＝秋葉正登、岩田祐佳梨



## ▲ 総合造形領域

映像や写真などのメディア芸術を用いた附属病院内での活動を行った。リハビリテーション部と臨床研究推進・支援センターとの協働では、世界糖尿病デーに関わるキャラクターの制作、及び治験のPR映像の制作を行い、けやき棟1階の大型3面モニタで上映を行った。制作者や運営者にとって実践的な経験を得ることができた。また、小児の入院病棟では、子どもたちが描いたイラストをアニメーション化して天井に投影するワークショップを実施。各階の廊下に展示されている写真「つくばはたらくひと」についても、病院と芸術の関係者による選定会を開催し、現場の意見を反映した作品の展示を行った。そのほか小児

病棟処置室および廊下の天井に投影する映像コンテンツの制作を実施。

担当教員＝村上史明／制作・運営＝有馬俊、石川文月、石田結香、市川航也、伊藤香里、井上拓哉、及川和也、大石望未、大井直人、奥田展也、金井啓太、神田千鶴、木村有希、窪田千莉、倉賀野美都、小林諒也、齊藤明美、佐々木楓、佐々木七海、佐藤賢吾、鈴木絹彩、鈴木ゆり、瀧下祐子、武石早代、田郷美沙子、太智花美咲、丹治遥、千葉美和子、沼田歩実、野口悠梨、早川翔人、藤原美由、別城拓志、堀内菜穂、堀真実、松村矜沙、水上理帆、山崎志帆、吉村弘幸

## 芸術と医学の協働

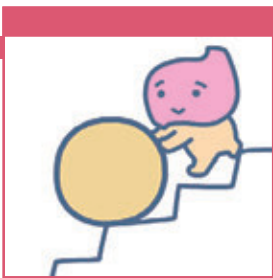
原尚人

(筑波大学附属病院副院長)

芸術学部(芸術専門学群)と医学部(医学群)が両方ともある大学が、日本でほかにあるだろうか。こんな貴重な環境であったのに、開学40年以上もたって、なぜ最近まで誰も気がつかなかったのだろう。医療の立場からでは、以前から特にヨーロッパを中心にアートセラピー(芸術療法)というものが存在していた。芸術専門学群や大学院の学生さんたちは自分たちの表現や作品を病院の様々なところで発表していただく機会になり、病院としても実験的な試みとなる。こんなありがたいwin-winの関係はない。そしてこのシステムはきっと将来の企業設立へのパイロット・スタディ(予備研究)にもなるはずである。

場所＝筑波大学附属病院

期間＝2014年4月～2015年3月



# アーティスト・イン・ホスピタル

## Artist in Hospital

Project

アートとケアの関係を共に考え、病院に新しいアートのあり方を提案する企画。筑波大学附属病院にて展開するアートを公募し3名を選出した。実施にあたり、病院側と話し合いを重ね、場所や時期、対象者などの検討をした。

▶ 右はアーティスト募集のチラシ。左は応募者に向けた説明会（7月11日）の様子。応募は全部で7組あり、審査は2段階方式によって行った。そのうち一次審査（右下写真、8月6日）にて選出された5組が二次審査へと進んだ。



◀ 二次審査会（8月20日）の様子。審査員票はわかれたがアーティスト・イン・ホスピタルにふさわしいアーティスト像と作品について、①実現性があること、②制作において人とかかわりがあるもの、③病院の空間の特徴をつかんでいるものといった可能性について議論し、五感に響く、病院のなかのパブリックな場所／プライベートな場所に着目した3提案によりアーティストを決定した。

## アートとケアの関係を共に考える

高橋和佳奈

(アーティスト・イン・ホスピタル実行委員)

アーティスト・イン・ホスピタルは、有志スタッフのマネジメントのもと、病院スタッフ、選抜アーティストと共に話し合いを重ね、様々な提案や可能性を共に考えながら、企画を作り上げていきます。病院とアーティストの仲介を行って、双方のイメージ共有が何よりも重要であると感じました。お互いに未知の部分が多いため、より具体的な状況を把握してもらうことを心がけています。病院での芸術活動に興味を持っている学生は予想以上に多く、今後の活躍に期待が持てます。今後も、病院の日常の中にアートが展開されることを通して、アートとケアの関係を共に考える機会を病院とアーティストの双方に提供していくことを目指します。

受賞者 = 飯田瑠璃子、つちやあゆみ、堀真実

期間 = 公募：2014年7月1日～31日 / 実施：2015年2月～3月

アーティスト・イン・ホスピタル実行委員 = 高橋和佳奈、徳田真奈美、出口真帆、中塚翔子、阿部美里

審査員 = 審査員長：貝島桃代(建築デザイン准教授) / 審査員：中泉多詔(つくば美術館学芸員)、福島紘子(附属病院小児科医師)、三ヶ田愛子(附属病院看護部顧問)、高橋貞子(附属病院副看護部長)、渡辺のり子(附属病院アートコーディネーター)、岩田祐佳梨(筑波メディカルセンター病院アートコーディネーター)、齊藤泰嘉(芸術支援コース教授)、村上史明(総合造形領域助教)、小野裕子(総合造形領域助教)、フォンデヴィリア・ハーベス・リム(外国語担当助教)

▶ つちやあゆみさんの作品「輪唱の○」(写真左)は階段状の木製の音板に木のボールを転がすことで音を奏でる作品。各作家とも事前に病院側にプレゼンテーションを行い、その後、場所や実施時期の相談をしていった。つちやさんはリハビリテーション部の希望もあり、リハビリ病棟、けやき棟正面玄関の2カ所にて展示を行った。また堀真実さんの作品「光の出張便」(写真右)は病棟の病室へ映像作品を届ける企画。ベッドから動くことのできない患者さんが横になったままで鑑賞できるベッドサイドのアートとして高く評価された。個室の患者さんは、作品鑑賞後、作家へ病気のことや家族のことなどさまざまな話をする姿が見られた。





# アートプロジェクトチーム アスパラガス

The Art Project Team “Asparagus”

Project

「病院の空気をおいしくする」をモットーに2005年から活動しているアスパラガスは、今年度「コラボレーション」「コミュニケーション」を目的に、3つのワークショップ(以下、WS)を行った。特に「はなさかうちわ」では病院スタッフと「はなさかとけい」では他団体との協働が実現した。



## ▲ はなさかうちわ

季節感があり誰もが使ったことのあるうちわをモチーフに選び、偶然にできた形や色などを楽しめる企画。このWSでは病院スタッフの協力もあり、開催場所まで来られない人の部屋に出張しWSを行った。病室に入ってWSをする機会は少ないため、非常に貴重な経験となった。また病院スタッフがWSの企画・運営に関わることで

病院でのアスパラガスの活動がさらに広がり、多様な企画が考えられることを実感した。

日程＝2014年7月23日、24日、25日／場所＝23日：9西病棟食堂デイルーム、24日：7西病棟食堂デイルーム、25日：B630病棟食堂／運営人数＝5人／参加者人数＝23日：14人、24日：18人、25日：24人

### ▼ アスパラガスともようがえ!

アスパラガスの活動拠点である「SOH」にて、新メンバーを加えてWS「なつのおちょうさん」を開催。看板を出したり、ゆったりとした音楽を流すことで気軽に立ち寄りてもらい、リラックスした状態で「おちょうさん」をつくったり、会話ができるように心がけた。病院内における広報や運営方法などの課題が明らかになり、次回の企画運営における参考になった。

日程=2014年5月30日/場所=外来診療棟廊下SOH/運営人数=6人/参加者人数=5人

## 病院×芸術のコラボで病院環境をより楽しく

三ヶ田愛子

(筑波大学附属病院看護部顧問)

筑波大学では附属病院と芸術専門学群がある強みを生かし、10年ほど前からホスピタルアートの取り組みを継続している。この間、ユニークで豊かな発想による数多くのアートイベントが病棟内外で展開され、病院を利用する多くの人たちの目と心を楽しませてきた。病棟の看護師は、参加した患者が生き生きと変化する様子を見て、アートと学生たちの元気力に感謝している。現在アートコーディネーターが2名に増え、ホスピタルアートへの期待は高まっているため、病院内各部署から患者・職員の癒しのためのアート企画を要請する声が増えていくと思われる。今後のホスピタルアートの継続・発展のために、色々な工夫でアート実践の基金作りをすることが急務の課題であり、関係者と共に努力していきたい。

場所=筑波大学附属病院

期間=2014年4月~2015年3月

担当教員=貝島桃代/メンバー=アスパラガス(打田雅俊、呉雨楓、白石珠奈子、出口真帆、町長しおり)

### ▶ はなさかとけい

病院内で営業を行うカフェ・スターバックスと筑波大学の医療系学生有志団体と行った企画。企画立案から準備作業、当日の運営まで協働した。企画の土台づくりはアスパラガスが担当したが、企画の意図や重要事項を他団体と共有する難しさを感じ、どう伝えれば理解してもらえるかを改めて考える機会になった。今回のWSは子どもを対象としたが、参加者の年齢を意識した企画づくりは初めての経験となり新たな発見があった。

日程=2014年11月3日/場所=外来受付ロビー/運営人数=5人(アスパラ)+約15人(他団体)/参加者人数=約12人(9組)





# デザインプロジェクトチーム パプリカ

Project

The Design Project Team “Paprika”

パプリカは、家具制作や空間改修で病院を彩ることをコンセプトに2008年度から活動している学生チームである。今年度のプロジェクトは、核医学検査室における待合室の環境改善のため、利用調査や職員へのヒアリングを行いながら照明の提案を試みた。

▶ 雑然としていた家族控え室を改修し、2014年3月に完成した「つつまれサロン」（写真左）。曲面の壁をつくり、包まれる安心感を創出した。同時期に完成した外来ラウンジの「こもればカーテン」は閉塞感の強かった部屋に柔らかな光を届けた（p.24写真左）。



## お互いが目指すものを「見える化」し 寛容さをもつ

長島明子

（筑波メディカルセンター病院広報課）

私は、パプリカなどが行うアート&デザイン活動と院内のさまざまな調整やマネジメントを当院のアートコーディネーターとともに行っている。今回のパプリカのプロジェクトのような施設本体の改修では、作り手側の意図に対する病院側の妥協のない承諾が不可欠だ。そこに至るには双方が目指すものをお互いに「見える化」することが重要である。そのために、病院側のニーズのヒアリング、改修場所の利用調査、職員と学生のワークショップなどに多くの時間を割いた。こうした時間とコミュニケーションの構築により、医療スタッフのこぼれと作り手である芸術系学生のこぼれが共有できたからこそ、プロジェクトを成功へと導けるのではないだろうか。ただし、全てをガチガチに進めるのではなく「完成してみないと分からないね」という冒険心を持つ寛容さを忘れてはならない。それこそが“いきいきホスピタル”を生み出すスパイスだと思うから。

▲ 核医学検査室待合室での患者や家族の過ごし方を知るための行動観察調査は患者に不快感を与えないよう白衣を来て実施。また病院職員との定期的な会議や職員へのヒアリングを行いながら案を改善した。写真上は現段階の照明案。天井に大きな間接照明を施し、光によって空間にメリハリをつけると同時に、長い待ち時間を過ごす時に心地よい明るい空間を目指している。

場所 = 筑波メディカルセンター病院

期間 = 2014年4月～2015年3月

担当教員 = 貝島桃代 / メンバー = パプリカ（安喜祐真、市川由佳、今村明日香、眞田峻輔、篠田夏於、島田絵、菅原楓、豊田正義、服部充紘、松本造、村上怜央、望月愛海）



# 小児科ゴブリンワークショップ

## Goblin Themed Workshop at the Pediatrics Ward

Project

週に一度、筑波大学附属病院小児科に入院している子どもたちとその家族を対象にワークショップを実施。アーティストの小中大地が「ゴブリン博士」に扮し「ゴブリン」と呼ぶ作品を制作するワークショップシリーズで、さまざまな題材を考案しながら実施した。

▶ ワークショップは基本的に小児病棟のプレイルームという部屋で行っているが、病室のベッドサイドで実施することもある。写真右はワークショップ中に子どもがまるシールで描いたゴブリン博士の肖像画。



◀ これまで約10種類のワークショップを開発・実施。いずれも身近な材料で、小さな子どもでも作業できるように意図した。左上から、紙皿ゴブリン、じゃばらゴブリン、水しぶきゴブリン、ピンポン球ゴブリン、ビニールテープ紙コップゴブリン、ダンボールゴブリン、まるシールゴブリン、ガムテープゴブリン、おりがみチョッキンパツゴブリン。

場所 = 筑波大学附属病院小児総合医療センター  
期間 = 2014年3月～  
アーティスト = 小中大地  
参加人数(合計) = 児童: 104人、保護者: 51人、職員: 14人  
実施回数 = 計30回(2014年12月31日時点)



# 筑波大学 附属病院前ガーデンプロジェクト

## University of Tsukuba Hospital Garden Project

Project

本プロジェクトは、癒しの空間提供として庭の設計から企画、制作、運営までを行っている。1年目は花壇の設計から制作、2年目を迎えた今年度は管理・運営はもちろんイベント企画・実施、作品展示、精神神経科とのデイケア実施などさまざまな活動により医療との積極的な連携を試みた。

### 維持・管理

1年を通してガーデンのメンテナンス作業を行った。その内容は、草取りや芝刈り、施肥、水やり、花期の終わった植物の花殻摘み、剪定、植え替えだった。水やりは中水道を使用した。ガーデンのメンテナンスについて難しいのは、天候に左右されやすくスケジュール管理がしづらいところである。今後は、できるだけ手間のかからない工夫（植物の選択など）をしていく必要がある。



### ◀ 西洋芝の種まき

1年中、芝の緑が美しいガーデンにしようと冬でも枯れない西洋芝（ケンタッキーブルーグラス、ベレニアルライグラス、トールフェスクの3種）の種まきを行った。ガーデン内に山砂が運搬され、山砂と種を混ぜたものをもともと植生していた日本芝の上に撒いていった。

4月

1

2日  
西洋芝の種まき

2

23日  
イベント  
「ガーデンオープニング(庭開き)」  
実施







2

### ▶ イベント「ガーデンオープニング（庭開き）」実施

庭開きは、テープカットならぬ芝カットで幕をあげ、参加者は芝を刈るときの感触に歓声を上げていた。また参加者と一緒にハーブの苗を植え付けた。ハーブクッキーやハーブティーなどをふるまい、学生から病院ガーデンの取り組みがスライドで紹介され、ガーデンの今後について関係者らと楽しく有意義な懇談が行われた。

場所＝ガーデン内及び医学食堂／司会進行＝竹淵翔太／参加者＝約40名



3

### ▲ 水まき

花壇を開墾した土地が保水力に乏しかったため、必要に応じて植物たちに水をやった。夏の多いときは1週間のうち3日～4日は水やりを行った。はじめは作業に慣れなかったが、何度か作業を重ねるうちにホースの巻き取りも上達してきた。

### ▼ ターフカッターでの花壇の縁取り

ガーデンの美しさの一つに芝地と花壇のはっきりとしたエッジがある。しかし、暖かくなると芝は旺盛に根を横に伸ばし、花壇内に侵入してくる。これを取り除くため、専用のターフカッターというガーデン用具を使って花壇の縁取りを行った。特に夏はすぐに根が伸びるため頻繁に行った。



4



5

### ▲ ガーデンの除草

ガーデンにはさまざまな植物が生育しているが、雑草もその一つである。雑草は、強く引っ張っても根っこが残ったりと本当に厄介な存在だが、負けずに引き抜き続けた。

5月

3

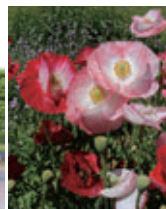
(半ば頃)水まき

4

20日  
ターフカッターでの  
花壇の縁取り

5

27日  
ガーデンの除草





### ◀ 近隣保育園児のお散歩ルートになる

もともとこの辺りがお散歩のルートとなっていたそうだが、ブタさんのいるガーデンは近隣の幼稚園児に親しまれ、病院内にほほえましい風景が生まれた。お散歩に来た患者も居合わせることもあり、園児たちの無邪気な姿に心穏やかになったことだろう。

12

### ▼ ヒヤシンスとチューリップの掘り起こし

4月になると花期が終わるが、花が枯れたあと1カ月ほど根から栄養を吸収させ、球根内に蓄えさせておく。その後、花壇から球根を掘り起こす。土を水で洗い落とし、乾燥させ、暗所で保管した。保存された球根はまた翌年も埋め戻され、訪れた人を楽しませる予定である。



6



7

### ▲ 院内にガーデンの広報用ブースを設置

附属病院の広報課より許可をいただき病院の正面玄関付近にガーデンを紹介するブースを設営。いままで取り組みを紹介したパネルや撮り溜めた植物の写真アルバムを展示するブースを設けた。また、ガーデンの見頃の花を撮影し大きな写真で紹介する企画も行った。



8

### ▲ ベンチの設置

プロダクトデザインを専攻する学生（趙麗華）が制作した木製のベンチをガーデン内に設置。設置後には、ベンチに座って休んだり、ガーデンの写真撮る来訪者の姿も見られ、ガーデンが徐々に人びとの居場所となっていた。

6月

6

3日  
ヒヤシンスと  
チューリップの  
掘り起こし



7

24日  
院内にガーデンの  
広報用ブースを設置

8

25日  
ベンチの設置

7月

9

29日  
夏花壇へ  
植え替え



## デイケアプログラム

ガーデンを利用したデイケアの取り組み。精神神経科外来と協働し、デイケアにてガーデンの空間利用を試みる実践を計4回行った。精神科の医師や看護師、作業療法士とともに、庭園療法に実績のあるアナグリウスケイ子氏をアドバイザーに迎え、ガーデンの植物を使ったワークショップやお茶やお菓子の提供のほか、メンテナンス活動も取り入れた。担当=大嶋千尋/アドバイザー=アナグリウスケイ子

### 第1回

ガーデンで採れたハーブを使ったクッキーやハーブティーを用意し、作業してもらうことを目的とせず、患者さんをもてなすことでリラックスできる場づくりを目指した。参加者=患者(成人)計8名、作業療法士:計1名、看護師:計1名/スタッフ=3名



11



9

### ▲ 夏花壇へ植え替え

春から咲き誇っていたワスレナグサやパンジーなどの花々がいよいよ陰りを見せ始めたため、夏の草花への植え替えを行った。日照りや乾燥に強いヒマワリやニチニチソウ、サルビア、ジニアなどへ植え替えた。



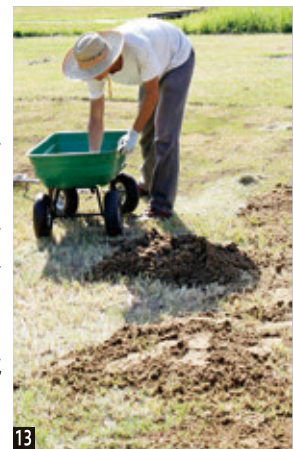
10

### ▲ 作品「暖」(小野養豚ん作)の設置

昨年度設置した立体造形の学生作品「プラスチック・プランツ」がイギリスの病院で展示されることになり搬出を行った。代わりに総合造形領域の小野裕子助教(小野養豚ん)制作のブタをモチーフにした作品「暖」を設置。突然現れた3匹のブタさんたちは、周囲から驚かれたが、ガーデンのマスコットとして定着していった。

### ▶ 芝の種まき

昨年度仕入れた山砂の残りを利用して西洋芝の施工範囲を広げる。新たに西洋芝の種を購入し、芝生広場へ砂と混ぜた種を蒔くことで、ガーデンの領域が広がって見えるようになった。



13

8月

10

1日  
作品「暖」  
(小野養豚ん作)の  
設置



9月

11

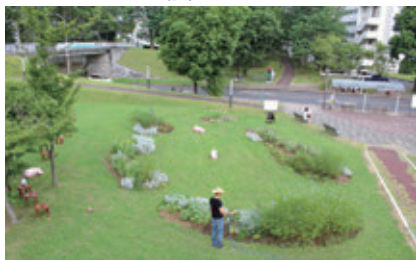
8日  
デイケア第1回

12

(中頃)  
近隣保育園児の  
お散歩ルートになる

13

28日  
芝の種まき



## 第2回

身近な調味料を用意し、オリジナルドレッシングをつくるワークショップ。ドレッシングをシェアすることで自然な会話が発生することを意図した。参加者=患者(成人)計7名、作業療法士:計1名、看護師:計1名/スタッフ=3名



## 第3回

3回目は、参加者は好みのガラスの器を選び、そこにガーデンに咲く草花を生ける。このプログラムで人にはそれぞれの心の器があることを感じてもらおうとした。参加者=患者(成人)計5名、看護師:計1名/スタッフ=3名

## 第4回

寒い天候のなか行われた第4回目。ガーデンで採れたハーブを入れた温かいスープを用意し、そこに白玉をつくって入れてもらった。参加者=患者(成人)計7名、看護師:計1名/スタッフ=2名



14

### ▲ コスモスの植え付け

少し遅めのタイミングではあるが、ガーデンに訪れた人に四季を感じてもらおう試みとして、コスモスの苗を仕入れガーデンの花壇や芝生地に植え付けた。3匹のブタさんとコスモスの咲くガーデンは幻想的でほほえましい光景となった。



16

### ▲ 菜の花の種まき

今まででガーデン化を試みてきたのは、附属病院の建物とそのバス停をつなぐ芝生広場の一部に過ぎなかった。この範囲を拡大させようと、菜の花の種を購入し、山砂と混ぜて蒔いた。翌春には菜の花畑もガーデンの一部となる予定である。

### ▼ ガーデン・テーブルベンチ修復作業

これまでガーデンには、ベンチのみしかなく、お弁当や飲み物を置いてご飯を食べる場所がなかった。これに対し、ガーデンに隣接する医学食堂に放置されたベンチ付きテーブルがあるのに目を付け、一度解体し、新たにペンキを塗り直すことで改修を試みた。



17



10月

14

7日  
コスモス  
植え付け

15

20日  
デイケア  
第2回

16

24日  
菜の花の  
種まき

17

25日  
ガーデン・  
テーブルベンチ  
修復作業

18

28日  
イベント  
「ガーデンカフェ」  
実施

11月

19

22日  
コスモスの  
種取り

20

27日  
デイケア  
第3回



## 新たな視点の獲得に

羽田舞子

(筑波大学附属病院 作業療法士)

デイケアでのガーデンプログラムを開始するにあたって「医療従事者の行う園芸療法や作業療法とどのような違いがあるのだろう」というのが一番興味のある部分であった。実際共に活動させて頂いて「空間を捉える」「雰囲気全体を生かす」視点は、我々には無いものを感じた。デイケア利用者の方々がガーデンの中で過ごす時間は、とても自然にくつろいだ様子で過ごされているのを見て、病院の中とは違う一面を見ることができた。違う分野の方と協力させて頂いたからこそ、我々も新たな視点を得、提供できるものに広がりが出たと感じている。



## 医療従事者にとっての癒しの場

栗原史帆

(筑波大学医学群医学類 学生)

今回、私はカフェを運営する友人に誘われて参加した。秋晴れの中、カラフルなお花を眺めながら頂いたブドウ紅茶や手作りのジャム、クッキー、スコーンはどれも美味しく、長い時間病院の中で実習をした後、最高の休憩時間となった。病院という場所は清潔が第一であるため白1色に塗られ、光がこうこうとしていて、無機質な空間である。医学生である私はそこに1日中いるわけだが、それと正反対のガーデンカフェは、患者さんだけでなく、医療従事者にとっても癒しの場になることだろうと感じた。



### ▶ コスモスの種取り

19

10月初旬に植え付けたコスモスはたくさんの種をつけた。これを来年度に使えるように種取りを行った。ガーデン活動の特徴として、種や球根が取れることによって、次年度以降は購入経費をかけなくてもある程度活動を続けられることがわかった。

▶ イベント「ガーデンカフェ」実施  
ベンチ付きテーブルを改修し、タープ（日除けテント）の完成を受け、お披露目イベントとして春に続き、ガーデンでカフェイベントを実施した。カフェでは手づくりのクッキーやスコーン、ジャム、フルーツティーをふるまい、参加者から好評を得た。

18



12月

21

8日  
デイケア  
第4回



## 筑波大学附属病院前ガーデン 秋の植栽図

1. この植栽図は2014年10月中旬のものである。
2. 図の配色について、基本的に花の色もしくは花が目立たない植物は葉の色を反映した。薄い茶は、何も植えていないか芽が出ていない箇所である。
3. ほかの季節の植栽に関しては以下に一例を挙げる。  
★春の花: ヒヤシンス、チューリップ、アネモネ、スイートピー、ワスレナグサ、パンジー、ヒューケラ、カンパニュラ、ツリガネソウ、アネモネ、ポピー、アマリリス、ルピナス ほか  
★夏の花: 各種サルビア、マロウ、ヒマワリ、ニチニチソウ、ジオア、メランポジウム、ポーチュユラカ ほか



## 多くの人びととの関わりのなかで

竹淵翔太

(病院ガーデンチーム リーダー)

私は病院におけるアートとしてのガーデンづくりの取り組みにリーダーとして関わり、プロジェクトのマネジメントをする貴重な経験となった。私の原動力は「実際にガーデンをつくってみたい」という意欲だったが、それを成し遂げるには自分ひとりの力では到底成し得ず、病院スタッフやアートコーディネーター、大学施設部との調整、またメンテナンスにおいてもチームメンバーの協力が不可欠だった。1年目は実験的な側面があり、病院屋外におけるアートの可能性を探る形となった。今後の課題として、現在は受講生だけでガーデンの運営を行っている状況だが、メンバーは必ずしも固定されないため、徐々に病院側を運営に巻き込んでゆくことが継続の鍵と感じている。またリサーチも十分でなく、改めて病院にどのようなニーズや問題点があるのかを拾い集め、病院に必要とされる場づくりに反映させていく必要がある。私個人としては今までの人生でほとんど関わることのなかった“病院”という世界に足を踏み入れたからこそ、人との出会いがあり、新しい考え方に触れることができた。

場所=筑波大学附属病院西口側バス停前

期間=2014年11月~

担当教員=鈴木雅和(環境デザイン領域)

ガーデン運営・制作=竹淵翔太、奥村瑛莉奈、黄欣涛、中塚翔子、イーエマル・プーア、大竹英理耶、大嶋千尋、村上怜央

運営補助=佐藤恵美

アートワーク=「暖」(制作者:小野養豚ん/

素材:FRP)「プラスチックプランツ」(制作者:石川文月、石田結香、伊藤香里、大石望未、神田千鶴、木村有希、倉賀野美都、齊藤明美、斉藤夢乃、佐々木楓、鈴木絹彩、鈴木ゆり、高橋佳乃、田口温子、太智花美咲、千葉美和子、中村沙耶香、永野真未、野口悠梨、服部真知、早川翔人、日高美樹、別城拓志、堀内菜穂、水上理帆、三宅映未、安田泰弘、山崎佳菜、若菜美帆/素材:FRP)

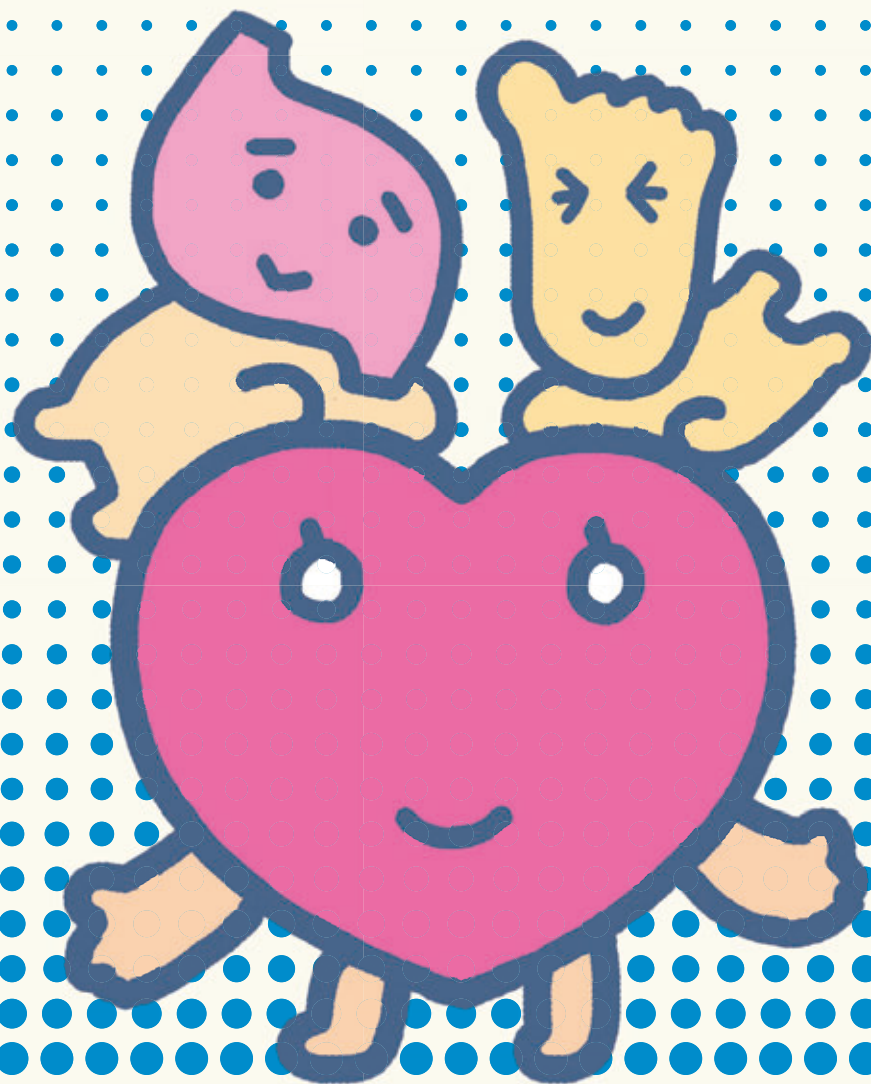
ベンチ制作=趙麗華

# 2

## 病院アートコーディネーターの仕事

### The Work of a Hospital Art Coordinator

筑波には2つの病院にアートコーディネーターがいる。「やりたい」「こうしてほしい」という思いだけではプロジェクトは進まない。医療と福祉、芸術などそれぞれの専門分野をつなぐ重要な役割を担うのが病院アートコーディネーターの仕事である。





# 筑波大学附属病院 アートコーディネーターの1年と1日

A typical Schedule of Art Coordinator at University of Tsukuba Hospital

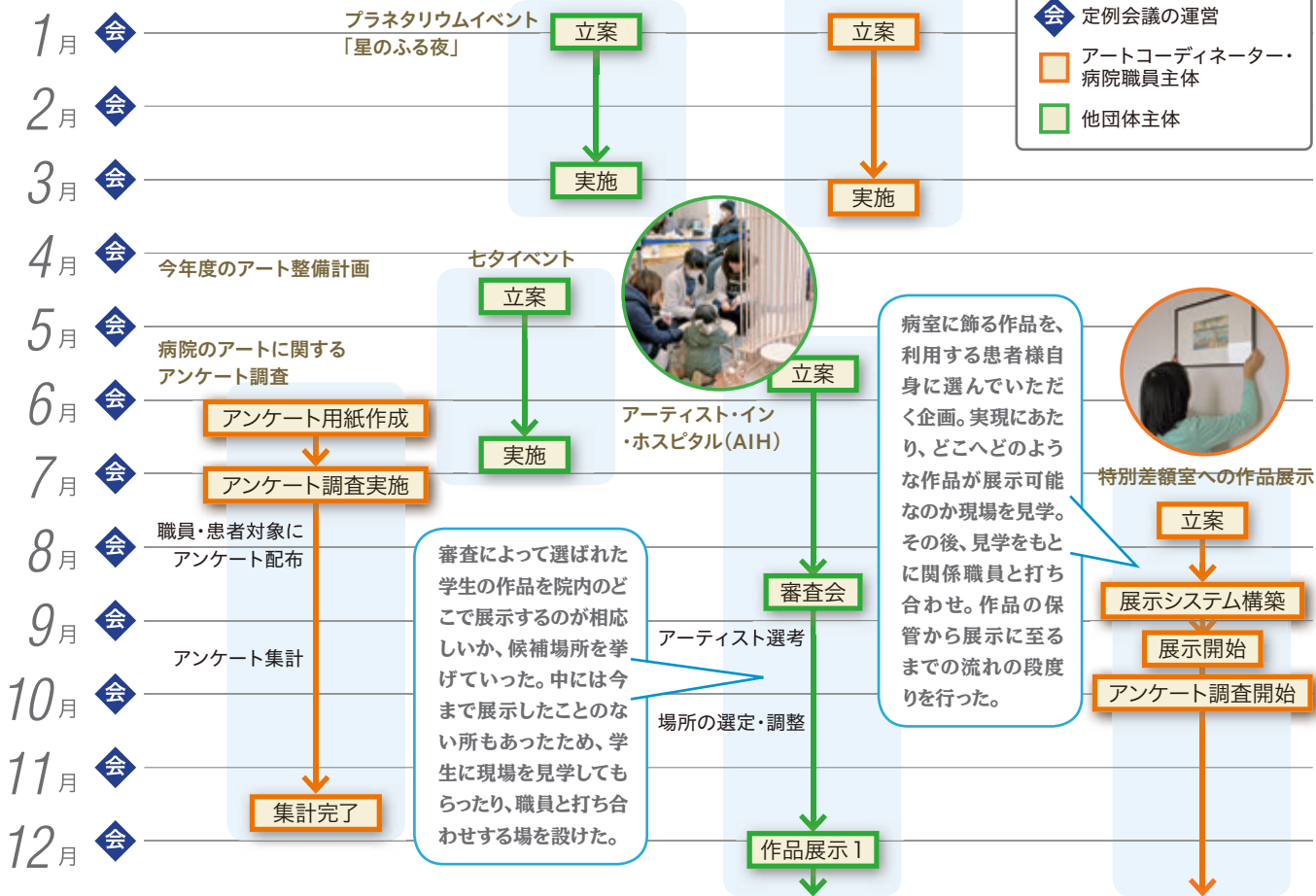
組織が大きく、関わる人も多い筑波大学附属病院には、アートコーディネーターの存在が不可欠だ。仕事量も年々増えており、2014年度より1名増員し2名体制にて運営を行っている。各部署と連携し、企画を実現するため日々奮闘している。

## ・病院のアートの1年とアートコーディネーターの仕事・

アート&ジャズライブ

凡例

- ◆ 定例会議の運営
- アートコーディネーター・病院職員主体
- 他団体主体







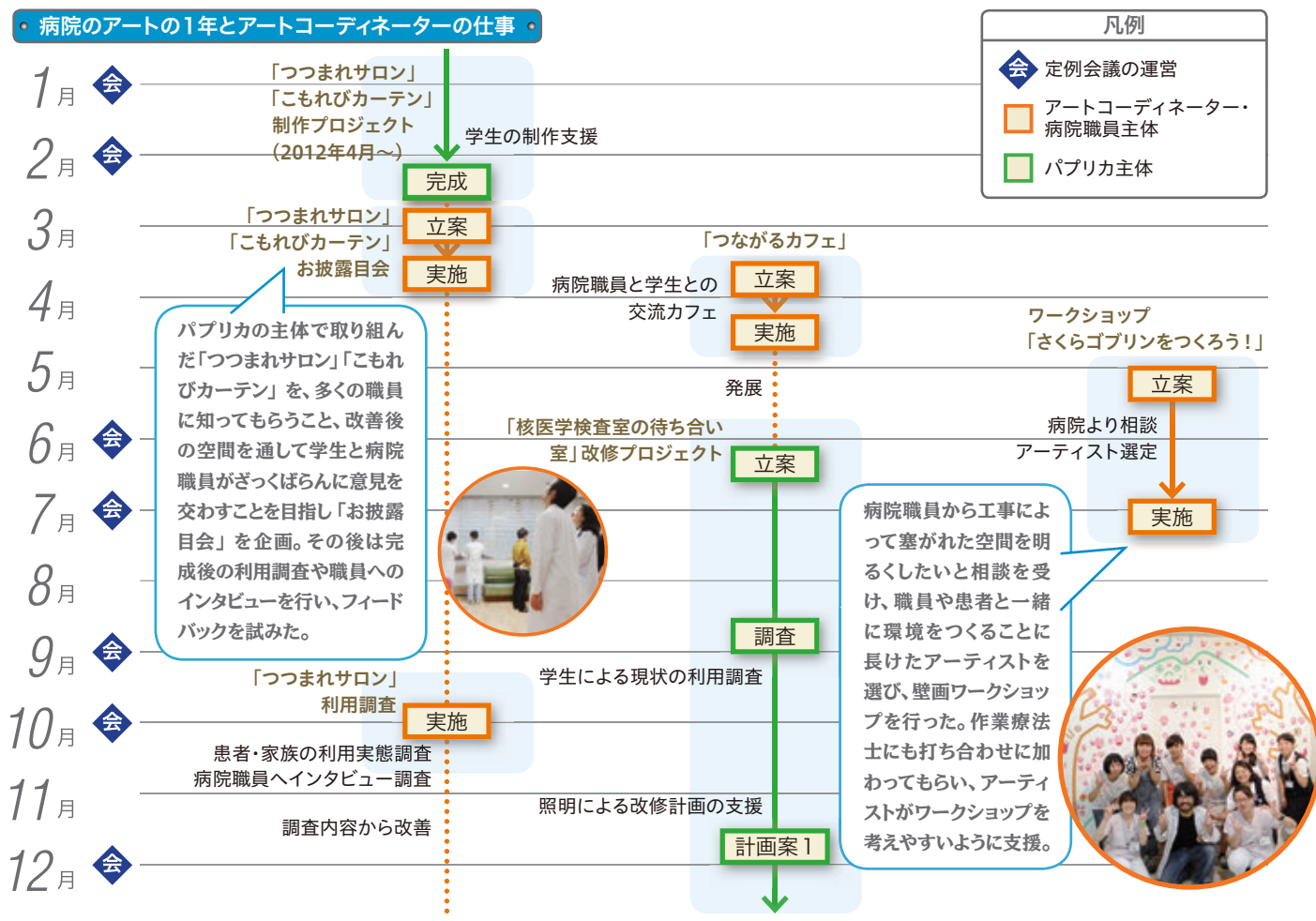


# 筑波メディカルセンター病院 アートコーディネーターの1年と1日

A typical Schedule of Art & Design Coordinator at Tsukuba Medical Center Hospital

デザインプロジェクト「パブリカ」(p.12)が活動する筑波メディカルセンター病院。パブリカの制作プロジェクトに付随しアートコーディネーター自身による病院職員向けの企画「つながるカフェ」や「お披露目会」を行い、丁寧にプロジェクトを進めている。

## ・ 病院のアートの1年とアートコーディネーターの仕事 ・



## 1日のスケジュール

- 8:30 出勤

---

- 9:00 ● 広報課職員や病院長にプロジェクトの進捗状況を相談

---

- 10:00 ● 「つまれサロン」について病院職員へのインタビュー

---

- 12:00 休憩

---

- 13:00 ● 「さくらゴブリンをつくろう!」報告のためのポスターづくり

---

- 14:00 ● 病院職員からの相談案件について企画を考える

---

- 16:00 ● 学生による核医学検査室の職員へのヒアリングをサポート

---

- 17:30 退勤

▶ 副看護部長へのインタビューの様子。幹部職員、管理職職員、現場職員のそれぞれの立場の職員にインタビューを実施し、率直な意見を聞く。



◀ 改修案を考えるために欠かせないのは現場の調査と使っている人の声。この現場とデザインを考えるチームをつなげるのはコーディネーターの仕事だ。



▼ ワークショップ後、患者や職員が作品について理解できるよう紹介するポスター。病院に残された作品がどのような経緯でつくられたかを示した。



### 凡例

- 企画・立案
- アーティスト・学生の支援
- 病院職員との調整、相談
- 広報
- 調査、フィードバック

所属 = 筑波メディカルセンター病院総務部  
 雇用人数 = 非常勤職員1名  
 勤務日数 = 週1日/1人

## より多くの人が病院づくりに参加できるように

岩田祐佳梨

(筑波メディカルセンター病院アート・デザインコーディネーター)

私は筑波メディカルセンター病院において、アートコーディネーターを勤めて4年目になる。近年取り組んでいる空間の改修プロジェクトでは、学生が利用調査やヒアリング調査を丁寧に行い、デザインに落とし込むというプロセスをとってきた。こうすることで、作り手である芸術側と医療の担い手である病院側が、現場の課題を共有しながらデザインの議論ができるようになってきたと感じる。患者・家族が過ごしやすく、病院職員がケアする空間として誇りや愛着を持てる環境をつくるために、改修プロセスや改修後の維持管理・活用に多くの病院職員を巻き込み、患者・家族が環境づくり、病院づくりに参加できるようなマネジメントを行うことが今後の課題だと思っている。

# 3

## 広がる病院アートプログラム

### Extension Art in Hospital Programs

病院アートのプログラムを他地域でも実践。イギリスのノーフォークにある大学病院や、大阪府堺市にある精神科病院などでワークショップを行った。また病院以外の空間にて紹介する試みとして図書館やギャラリースペースでの展覧会を行った。





# スーパー・ナチュラル・ガーデン ／ NNUH

Project

## The Supernatural Garden at NNUH

これまで日本国内のみで行ってきた病院アートマネジメント人材育成プログラムを2014年9月にイギリスのノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院(以下、NNUH)で実施した。同病院に勤務するアートコーディネーター、看護師などの職員を育成対象とし、OJT研修として行った。



▲ プログラム全体を「スーパー・ナチュラル・ガーデン」と名づけ、病院ロビー、病院内レストラン、病棟内プレイルーム、病院敷地内庭園等においてワークショップ(美術作品制作、読み聞かせ、パフォーマンスなど)を開催。また筑波大学附属病院のガーデンにて設置していた「プラスチック・プランツ」をNNUHのガーデンに提供(写真)。

▶ 小中大地は「マスキングテープ壁画ワークショップ」や「池ゴブリン」制作などを行った。芸術系教員や研究員が、NNUHの病院アートコーディネーターや看護師、ボランティア、アーティストにプログラム内容を事前に説明し、患者や職員の参加を得て、ワークショップなどを実施。研修参加者にアンケート調査を行い、これまで筑波大学で培ってきたアートマネジメント人材育成プログラムのノウハウが海外でも有効性を持つことを確認した。



場所=ノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院

日程=2014年9月10日~9月15日

担当教員=齊藤泰嘉

運営・実施=市川寛也、小野裕子、小中大地、大石望未、齊藤明美、鈴木絹彩

コーディネート=エンマ・ジャービス、ハーベス・リム、フォンデヴィリヤほか



▲ 市川寛也による「遠野河童伝説紙芝居と河童紙相撲」と小野裕子による「ろうそくづくりワークショップ」。



## 「スーパー・ナチュラル・ガーデン」から学んだこと

エンマ・ジャービス

(ノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院アートコーディネーター)

筑波大学チームが実施したプログラム「スーパー・ナチュラル・ガーデン」から多くのことを学んだ。それまで自分たちが病院で行っているプロジェクトは、いつのまにか患者に対して同じことを繰り返していることに気づいた。筑波大学チームのプロジェクトは、はるかに創意工夫に満ちており、細心の注意が行き届いていた。筑波大学の同志たちからたくさんことを学んだが、さらに文化の違いを探求し、新しいプロジェクトを誕生させたいと思っている。イギリスでは、物事をすべて一律に進めようとするために細部への注意を失いがちになってしまう点があるが、細部こそ最も大事なのである。

### What We Have Learnt From The Supernatural Garden

We have learnt a lot here at the Norfolk and Norwich University Hospital - The Supernatural Garden (exhibition and workshop series) has had a far reaching effect on our work. Our projects are becoming increasingly more personal with a more considered approach. We are now carrying out projects working directly with patients on a more regular basis. These projects are by far more innovative and attentive. We have learnt a lot from our colleagues in Tsukuba, however we still have much to learn through exploring our cultures. We hope very much to establish new projects in the next two years. I realise sometimes in England we try to do too much all in one go and then lose the attention to the smallest details - it's those small details which are in fact, the most significant!

—Emma Jarvis

(Hospital Arts Coordinator, Norfolk and Norwich University Hospital)



# ワークショップ「空ゴブリン」 ／ 阪南病院

“Sky Goblin” Workshop at Hannan Hospital

Project

大阪府の精神科病院・阪南病院にてワークショップ「空ゴブリン」を実施。当院にて庭園療法を実施しているデザイナーがコーディネートを担当し、看護師、作業療法士らのサポートのもと、子どもと大人の患者が参加した。



◀ 「空ゴブリン」はアーティスト・小中大地による空に表情をつくるワークショップ。透明のシートに目、鼻、口など顔のパーツを施したシールを貼り、そのシートを空にかざしてゴブリン（妖精）を見るというもの。屋外に出る機会の少ない入院患者に、空に触れてもらうことを意図した。

▶ 1日目は小学校中学年～中学生が参加した。参加者により作業時間にばらつきは見られたが、初めはまったく手をつけなかった子どもも次第にシールを貼る作業に没頭していた。看護師によると、普段は作業療法等にもあまり積極的に参加しない子どもも、今回のワークショップは進んで参加していたとのことだった。





▲ 2日目は天気もよく屋外で作業を行った。屋外に出ること自体、機会の少ない患者が多い。できた作品を空にかざして撮影した写真を見せると、それまであまり表情のなかった患者の多くに笑顔が見られた。看護師や作業療法士にとっても普段の業務とは異なる経験であり作家不在でも「空ゴブリン」を実施したいとの要望から材料を提供。

その後のアンケートでは「自身の仕事上どのような点が参考・活用できそうか」という問いに「(ワークショップの説明の際に) 作業の楽しさや印象が伝わるよう、わかりやすく話している点」(作業療法士)、「シールを使うのは絵が苦手な人でも取り組みやすい」(精神保健福祉士)、「作品を通して今の自分を発見できる点」(作業療法士)などの意見があった。

## 人が人にどのように寄り添って行けるのか

アナグリウスケイ子

(阪南病院 環境デザイナー・庭園療法士)

私の庭は自然を友として存在しています。ハーブは、華やかな花を咲かせることはなくても香りで答えてくれます。それぞれに美味しい香りもあれば嫌な匂いもありますが、自由に選ぶことができ決して強制されるものではありません。精神を病むときは何かに押されて「怖い」という心が一杯になったとき。私はそうした患者さんを優しく支えてくれるハーブという道具や楽しむ方法を伝えたいと思っています。「空ゴブリン」のとき、患者さんのなかには妖精・ゴブリンを「怖い」と感じる人もいるかもしれない。そんな不安がよぎりましたが「私の病の中に訪れるのは、もしかしたらアートのゴブリンかもしれないよね」。そう話してくれた患者さんがいました。人間が人間をどのように癒し寄り添うことができるのか。私たちが生きるために、空にも花にも葉にも友だちが存在していることでゴブリン博士は「自然はやさしい友だちだ」と伝えてくれました。

場所 = 阪南病院(大阪府堺市)

日程 = 2014年5月15日、16日

対象 = 小児精神科患者(子ども):12名、精神科患者(大人):4名、庭園療法受講生:2名、看護師・作業療法士:15名

コーディネーター = アナグリウスケイ子

ワークショップ指導 = 小中大地





# 「ゴブリン博士の病院ゴブリン」 アーカイブ展

Exhibition

“Hospital Goblin by Dr. Goblin” Archive Exhibition

筑波大学附属図書館 体育・芸術図書館にて「ゴブリン博士の病院ゴブリン」アーカイブ展を実施した。アーティストの小中大地が2009年に筑波大学附属病院で行った企画の記録展。図書館職員による企画。

▼ 展示期間中には、今後の図書館での展示展開について、図書館職員との議論が交わされた。



◀ マスキングテープを素材とし、ライブペインティングのかたちで壁画を制作した。また展示は図書館のパネルを利用し、正面には立体作品写真、左面には報告書、右面には壁画を配置。



## 司書が手がける企画展

中村洋子

(筑波大学附属図書館情報サービス課主任専門職員)

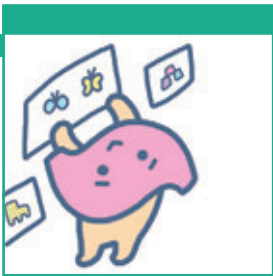
体育・芸術図書館では、今年度から新たな試みとして、館内に展示エリアを設け、学習活動や研究成果を公開する場として提供している。その第一号が「ゴブリン博士の病院ゴブリン」アーカイブ展である。館内に突如現れた病院ゴブリンの壁画に、多くの入館者が驚き、親しみを感じていた。さらに、大学説明会における本学の卒業生の活動を紹介する企画として、受験生にとっても良い刺激になったようである。このように図書館展示は、学内のアート活動を日常的に実感できる場として効果的であり、図書館という学習の場で展示を行うことで、活動の理解や普及に一層の拡がり期待できることから、引き続き積極的にサポートを行っていきたい。

場所 = 筑波大学附属図書館 体育・芸術図書館

日程 = 2014年6月25日～9月29日

コーディネート = 中村洋子、高橋和佳奈

アーティスト = 小中大地



# 展覧会「芸術支援展 ケア×アート I ——筑波大学における 病院アート活動のあゆみ」

Exhibition

## Exhibition “Care×Art I—Art in Hospital at the University of Tsukuba”

これまでの約10年にわたる筑波大学での病院アート活動のあゆみを振り返り、検証する展覧会。制作した作品やアーカイブ、関係者へのインタビューの展示など3会場での展覧会のほか、外部専門家によるレクチャーを実施。

▶ 芸術系ギャラリーでは2フロアにわたりこれまでの取り組みを、関係者へのインタビューと写真、資料などで紹介。パネル、ワークショップ備品、作品なども展示した。





▶ 大学会館アートスペースでは、病院でプロジェクトや制作を行っていくプロセスに焦点をあてた展示を行った（写真左）。3つ目の会場・総合交流会館では、ケアとアートに関する資料やレクチャー講師の著作等のライブラリースペースに（写真右）。アンケートからは「アートプロジェクトにおいて、完成した作品はもちろんだけれど、それまでの過程の記録を展示していくことがとても大事なのだと感じた。今回の展示の中で感じたことや様子についてのコメントを貼っていたのがとても良かったと思う。その中で参加者の手でさらに発展して活動が続いた、というようなものがあり、これこそアートプロジェクトの重要な点なのではないかと考えます。やって終わり、観て終わりではなく、企画者から参加者の手に渡り、成長していくもの、そんなプロジェクトをつくっていくにはこれまでのプロジェクトの記録から学べるものが多いと思います」（学生）、「試み的な活動ということで、考える人や種が植えられた地面は色々・ばらばらなのですが、芽を出す地面が異なっても、茎がするすると伸びていく方向、それはそろっている感じがするなと思いました。太陽のあたたかさの方にのびていくみたいな感じがしました」（介護士）などの意見があった。



**場所** = 筑波大学芸術系ギャラリー、大学会館アートスペース、総合交流会館

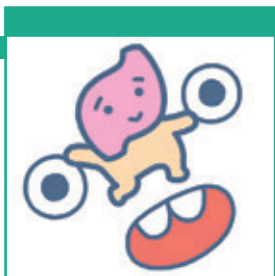
**日程** = 2014年9月30日(火)～11月9日(日) ※総合交流会館のみ：～10月10日(金)

**イベント** = 「ケアとアートを考えるレクチャーシリーズ」  
**ゲスト** : 10月23日(木) 林容子氏(一般社団法人アーツアライブ代表)、10月29日(水) 高橋伸行氏(名古屋造形芸術大学准教授)

**協力** = 病院のアートを育てる会議、筑波大学附属病院、筑波メディカルセンター病院



◀ 会期中、病院や福祉施設でのアートを長きにわたり実践する林容子氏と高橋伸行氏によるレクチャーを開催した（p.38、p.40）。



# 展覧会「病院ゴブリン博士展 —ケア×アート II」

Exhibition

“Dr. Goblin in Hospital—Care×Art II” Exhibition

筑波大学芸術系ギャラリーにて「病院ゴブリン博士展」を実施した。アーティスト・小中大地の活動記録展。病院での活動を主とした、これまでの様々な活動の記録作品が展示された。



▲ 2階ではマスキングテープによるライブペイントを開催した。鑑賞者とアーティストとのコミュニケーションを作品に反映させながら、色鮮やかな壁画が制作された。

▶ 会場の1階は病院での活動の記録作品を展示。2階には病院以外の活動の記録作品を展示した。記録作品は、各プロジェクトの記録写真と立体作品とで構成した。



◀ 1階には常時ワークショップを行えるスペースを設け、病院でも行っている「ガムテープゴブリンワークショップ」を実施。子どもから大人まで幅広い年齢層の来場者が参加した。

場所 = 筑波大学芸術系ギャラリー  
日程 = 2014年12月2日～2015年1月30日  
協力 = 病院のアートを育てる会議、筑波大学附属病院、筑波メディカルセンター病院

# 筑波大学の病院アート活動のあゆみ

「芸術支援展 ケア×アート I——筑波大学における病院アート活動のあゆみ」より、筑波大学でのこれまでの活動のあゆみを紹介。

## 2002年

筑波大学附属病院で筑波ユニバーサルデザイン研究会「.tud (ドットタッド)」が活動開始。

## 2005年

アート・デザインプロデュース演習 (adp) による「筑波大学附属病院リニューアルプロジェクト」のなかでアスパラガスが発足し、手探りでワークショップを実施。

## 2006年

外来診療棟と中央診療棟を結ぶ渡り廊下の改修と「アートステーションSOH (Seeds of Humanity)」の提案。 .tudによるワークショップも実施。

## 2007年

筑波メディカルセンター病院で「フロンティアーズ」が展示活動を開始。「アートステーションSOH」が完成し継続的に活用・整備を行う。家具デザインチーム発足。

## 2008年

病院でのアートプロジェクトにより多くの学生が参加できるようアスパラガスはレジデンスプログラム「アスパラレジデンス」を開始。家具デザインチームを「パブリカ」と命名。

## 2009年

アスパラガス、パブリカ、フロンティアーズは、それぞれ展示、レジデンス、ワークショップ、空間改修など多様な活動を展開。

## 2010年

アスパラガス、パブリカ、フロンティアーズは、病院での課題に向き合いながら、家具製作やワークショップなどの活動を実施。

## 2011年

アスパラガス、パブリカは、病院職員と一緒にワークショップ、家具・プロダクトを考案。筑波メディカルセンター病院にアートコーディネーターが設置される。

## 2012年

筑波大学附属病院でけやき棟建設に伴い、より多分野の芸術系教員や学生との協働が開始し「病院のアートを育てるWG」が発足。筑波メディカルセンター病院で大学と病院の交流イベントを開催。

## 2013年

複数の教員や学生が病院でのアート活動に参加。病院と芸術をつなぐために、筑波大学附属病院にもアートコーディネーターが設置される。

## 2014年

シンポジウムや研修などを実施し、病院でのアート活動をマネジメント、コーディネートしていく人材の育成を行う。

※アスパラガス、パブリカ、フロンティアーズの活動はすべてアート・デザインプロデュース演習の一環として行われている。



# 医療・福祉におけるアートの役割と効果

— 認知症の方とその家族のための対話型鑑賞プログラム

林 容子 [一般社団法人アーツアライブ代表 / 尚美学園大学大学院准教授]

Yoko Hayashi

[Arts Alive Chairperson / Associate Professor of Art Management, Faculty of Art Informatics at Shobi University]



はやし・ようこ

一般社団法人アーツアライブ代表。国際基督教大学、デューク大学で美術史を専攻し、コロンビア大学にて芸術運営管理学修士取得。帰国後キュレーター、コーディネーターとして多数の展覧会企画運営に関わる。1999年より学生や若いアーティストとともに病院や老人介護施設でのアートプロジェクト (ArtsAlive) を企画、実施。尚美学園大学大学院准教授。平成23年度安倍フェローとして米国にて高齢化におけるアートの効果について国際共同研究を続ける傍ら、MoMAが開発した認知症の方とその家族のための対話型鑑賞プログラムを日本に導入、実践している。

キュレーターとして国内外で活躍していた林容子氏が1999年に立ち上げたのが、病院や介護施設でアートプログラムを展開する活動、アーツアライブ。特に認知症とその家族のためのプログラムは国内で唯一の取り組みである。なぜ最先端のアートムーブメントではなく、こうした活動を続けているのだろうか。

## アートの持つ創造性、非日常性を生かしていく

私の専門はアートマネジメントですが、アートをどう社会で生かすかという方法論を考え、実践してきました。そのなかで1999年に開始したのが、病院でのアートプログラムをプロデュースする組織「アーツアライブ」です。アーツアライブの最初の試みは、静岡県の特別養護老人ホームで美術系大学の学生と一緒に行いました。そこでは利用者の方が建物内で迷うことがあるため、提案したのは目印になる壁画。私は「その場ならではの作品をつくる」「適材適所のアート」という考え方を持っています。例えば寝たきりの方は丸一日中、その壁画を見ることになる。それが自分の気に入らないものだと不愉快ですよ。私たちが関わるのが押しつけになってはいけなと、利用者の方々にヒアリングをしました。するとある女性は「お兄さんと行った村祭りが楽しかった」と。ではどのような着物を着ていたのかなどと質問を続けると、どんどん話してくださいました。そのお話に応えながら、学生が和紙の貼り絵でその状況を描く。この活動を続けていくうち、最初は少し怪訝な顔をされていた介護師さんたちも評価

してくださるようになり、そこでの同様のプログラムは8年間続きました。

アーツアライブは、アートの持つ創造性、非日常性を生かすというミッションを掲げています。この非日常性は、施設や病院などの空間では特に有効的です。人びとの実生活と仕事の場にこれらを取り入れることで閉塞的な思考や環境が革新し、いきいきとした社会とクリエイティブな産業、そしてQOL (Quality of life) の向上に貢献していくと考えています。

## アートコミュニケーションプログラムの実践へ

アーツアライブは「アートコミュニケーションプログラム (以下、ACP)」を実践しています。これは、ニューヨーク近代美術館が2006年に開始した認知症の方とご家族、そして介護士が対等な立場で一緒に体験する対話型のアート鑑賞プログラムです。私はこのプログラムをニューヨーク近代美術館で初めて見たとき「本当にこの人たちは認知症なのか」と驚きました。これは日本でも喜ばれるのではと考え、最初にプログラムを実施した際、ある認知症の方の発した一言が今でも心に

# The Role and Efficacy of Art for Medical Care and Well-being

## -A Dialogue Based Art Appreciation Program for those with Dementia and their Families-

残っています。それは「日々喜びもなく生きていて意味があるのか」と思っていました。こんなプログラムがあって美術館に行けるのだったらそれが生き甲斐になる」という言葉でした。私はその一言を聞き、日本でもこれを普及させたいとニューヨーク近代美術館に許可を得て、ACCのエducーターの養成を始めました。現在は、東京の国立西洋美術館等で月に1回定期的に開催しています。

脳は人間の身体の中でも、刺激を与えれば死ぬまで成長する箇所。私たちは若いときだけが創造的と思いがちですが決してそうではありません。認知症になると脳が萎縮しますが、たとえ認知症になっても冒されていない部分もあり、そこを刺激すればどんどん新しい記憶もつくられていきます。多様な要素があり、多くの刺激に満ちたアートは認知症に有効なのです。

そして認知症患者の能力をフルに活かすにはどうしたらいいか。これはアートの世界で生かされます。アーティストは独特の感性を持っていますが、認知症の方もしかりなのです。例えば鑑賞プログラムをやっても認知症の方はとても面白い見方をされます。一般の社会ではマイナスになることがアートの世界ではプラスになる。何がノーマルなのか。ノーマルという基準も私たちが勝手に決めているものではないか。そういう多様な考え方ができるのがアートです。高齢になっても創造的であることが可能なのです。

### 認知症におけるアートの効果を検証する

こうして多くのアートの効果は期待されるものの、病院も高齢者施設も芸術を簡単には受け入れられません。タダでや

ってくれるならまだしも予算化は難しい。医療や福祉の側が予算を付けられるのは、やはり効果が明確なもの。薬を飲むと進行を遅らすことができる。リハビリをすると足が動くようになる。といったように、効果とその根拠が必要です。ではアートではどうなるのでしょうか。私は現場の経験からアートには価値や意味があり、あらゆる変化を起こせるとわかっています。ですがそれを伝えようとしても理解してもらうのはなかなか難しい。

そこで医療や福祉に携わる方の視点で理解してもらおうと始めたのが次に紹介する研究です。平成23年度からアメリカ・ケースウエスタンリザーブ大学教授のピーター・ホワイトハウス博士(脳神経学者)のもとで、アートが脳の高齢化に与える影響とアートプログラムを介護に導入する際の政策課題について研究を行っています。また平成25年度には国立長寿医療研究センターとアートプログラムが高齢化予防に与える効果についての研究を行いました。

こうした研究も進めていますが、一方でアートの側からの評価もしていかなければならないとも思っています。どうしても美術史の世界では、歴史に残るか、オークションで売れるか、有名か、後世のアーティストに影響を与えたか。これしかないですが、でもそれだけがアートの指標ではないと私は思いたい。だからこうした美大の学生さんたちが一元的ではなく多様な見方でアートと社会の接点を見て、アートの価値を見たりつくり出してほしいと、そうすれば変わるのではないかと期待しています。

(2014年10月23日/モデレーター=齊藤泰嘉(筑波大学芸術系教授)/場所=筑波大学芸術学系棟2階会議室)



# ケアにとってアートとは何かを考える

～「やさしい美術プロジェクト」の実践から

## 高橋伸行 [やさしい美術プロジェクトディレクター／名古屋造形大学教授]

Nobuyuki Takahashi

[Director of Yasashii Bijutsu Project / Professor of Nagoya Zokei University of Art & Design]



### たかはし・のぶゆき

やさしい美術プロジェクトディレクター、名古屋造形大学教授、+GalleryPROJECTメンバー。愛知県立芸術大学美術研究科大学院彫刻科修了。病院（緩和ケア病棟など）、老人福祉施設、障害者施設、ハンセン病療養所、東日本大震災被災地域などでアートプロジェクトを展開。国立療養所大島青松園での取り組み「【つながりの家】」で瀬戸内国際芸術祭2010、2013に参加、2013年度グッドデザイン賞受賞。大島青松園の入所者、鳥栖喬（とすたかし／故人）の名を襲名。

医療機関や福祉施設で展開するアートプロジェクト「やさしい美術プロジェクト」を率いる高橋伸行氏。前半は高橋氏による「やさしい美術プロジェクト」を中心とした活動の紹介、後半はモデレーター村上史明や受講者を交えてのトークを行った。受講生にはアートやデザインに携わる者のほか医療従事者もあり、ケアとアートをめぐる議論が行われた。

### 関係性の中で始まるプロジェクト

「やさしい美術プロジェクト」を始めたのは2002年。初めは患者さんへのインタビューを愛知県厚生連足助病院にて行いました。病院側も活動趣旨に賛同してくださり、学生と共に病室をまわりました。この体験は人が「痛みを携えて生きている」そのこと自体を見ているようでした。彫刻などのように造形的に自律した作品ではなく、関係性の中で作品ができていく。鑑賞者だけでなく制作者側にも様々なことが呼び覚まされる可能性を感じました。

2004年には小牧市民病院（愛知県）の緩和ケア病棟にて、患者さんや家族が握って感触を楽しみ、一緒に握り合ったりする木製の「にぎにぎ」という作品を学生が制作しました。患者さんの病状によってはただ手を握り合うという方もいるため考案された作品です。ただ握るだけではなく、その時間をどのように過ごすかと想像をめぐらすことが重要です。アートとは言わずとも、看護師の皆さんは日常的に語り掛ける言葉や接する仕草を創造しているのではないかと思います。だか

ら、やさしい美術プロジェクトの活動は美術やデザインに何ができるのかということは語らないのです。

### 島そのものが表現である

ハンセン病は感染すると末梢神経が麻痺し、手の形が変わったり指が欠損したりする病気です。国の誤った政策により1996年までハンセン病の患者さんたちは強制隔離されました。瀬戸内海の大島（香川県高松市）は島全体が国立のハンセン病療養所「大島青松園」です。らい予防法は廃止されましたが、今も大島で元患者さんが暮らしています。2007年に初めて大島に行き、島の人たちと少しずつ交流を重ねていくと、島に住む皆さんがどのように暮らしているのかが徐々に見えてきました。辛かった療養所での生活について多くの話を聞く一方で、ここでいきいきと生きてきた証を残したい、大島のイメージを変えたいという思いも多く聞きました。この時点でアーティストがそこで何かを表現するという考え方ではなく、島そのものが表現していることを、外につなげる活動ができ

# Reflection on the Art for Caring from the Hospital Art Project “the Yasashii Bijutsu”

ないかという考えに切り替わりました。

そうして、2010年の瀬戸内国際芸術祭を機に生まれたアートプロジェクト{つながりの家}は「カフェ・シヨル」「ガイドツアー」「GALLERY15」の3つのプログラムが互いに連動しながら、多様な人々が島に来るきっかけや出会いを生み出すものです。「GALLERY15」は島で預かり見つけたものを「生きてきた証」として表現するギャラリー。元住居棟を活用し、元患者の生活用品や写真を展示しています。

2013年での瀬戸内国際芸術祭ではここで舟を展示しました。この療養所では看護師や医師が充分ではなく、軽症者が重傷者を看ることもありました。患者が患者をケアしていたのです。ハンセン病が治っても、島内の患者作業に携わるうち、また病状が悪化することもあったそうです。そうした厳しい療養所の暮らしのなかで、釣り舟は自由の象徴でした。高齢化により今では釣りに出ることはなくなりましたが、浜辺の舟小屋に残された一艘を掘り出し、「GALLERY15」の一室に置きました。さらに床下に穴を掘り舟底が見ることのできる空間にしました。その様子を元患者の皆さんに見せたところ、皆さんの想い出話がとめどなくあふれました。舟が記憶の引き金になったのでしょう。悲しい記憶もたくさんあると思いますが、そのときは海の光や新鮮な魚の様子を思い出させていました。

一般公開され、次第に芸術祭に来たお客さんに作品の説明をする島の方も増えました。するとこの島全体が徐々に開放的になり、元患者の方々もお客さんに気軽に挨拶されるよう

なりました。

## ケアとアートをめぐる、受講者との対話

**受講者1(芸術系教員):**現代美術の文脈で語った場合、医療や福祉に関わる芸術活動とはどういう視点で考えればよいのでしょうか。

**高橋:**例えば「ホスピタル・アート」という言葉がありますが、現場で活動している人はジャンルをつくりたいわけではないですよね。そこで何かできないかともがいているのが、おそらく正直なところだと思います。他者と共感したり自己のなかに他者を映す回路が人間には備わっていると僕は思っていて、それを現代美術として表現しています。これはアートに限らず、あらゆる分野に通じることではないでしょうか。

**受講者2(病院長):**高橋さんのご活動はクリエーションしたものをただ持ち込むのではなく、そこにいる組織や人の五感、空気感、時間をデザインされているのですね。それらを引き出すためのフックを置くために作品をつくられているのだなど。私は筑波メディカルセンター病院に所属しており、筑波大学の芸術系と一緒に活動していますが、そこで自分が何を求めているか、実はまだ咀嚼している段階です。ですが高橋さんのお話を今日伺い、そのあたりの答えが見えてきた気がしています。

(2014年10月29日/モデレーター=村上史明(筑波大学芸術系助教)/場所=筑波大学芸術学系棟2階会議室)

# まなざしのデザイン

## Design of Perspective

### 花村周寛 [ランドスケープデザイナー/アーティスト/大阪府立大学准教授]

Chikahiro Hanamura

[Landscape Architect / Artist / Associate Professor of Osaka Prefecture University]



病院をはじめとする国内外の施設・地域でインスタレーションやランドスケープデザインなど様々な制作・デザイン活動に携わってきた花村周寛氏。その場所と個人との関係性が変化することで新しい風景が生まれる試み「まなざしのデザイン」の思想と実践をお話いただいた。

#### はなむら・ちかひろ

ランドスケープデザイナー、アーティスト、俳優、大阪府立大学観光産業戦略研究所准教授、一般社団法人プリコラージュ・ファウンデーション代表。「風景異化」をテーマに作品制作を行う。またクリエイティブシェアをコンセプトにアトリエを構え、領域を超えた芸術表現と生活創造のプロジェクトを行っている。病院でのインスタレーション「霧はれて光きたる春」を2010年に大阪市立大学医学部附属病院、2012年に大阪赤十字病院で実施し「DSA Design Award 2012」大賞などを受賞。

#### 病院で、風景を変える

視点を変えることで、見慣れた風景が違って見える経験はありませんか。場所に対する人のまなざし(視点)が変わることで新しい風景が生まれ、また消えていく。こうして風景は生成と消滅を繰り返しています。私は「まなざしのデザイン」という観点から、今見えている風景がまるで違ったものに見える“風景異化”という現象を意図的に起こすという活動を様々な場所で実践してきました。

なかでも病院は人の命を預かる場所であり制約の厳しい空間。だからこそ病院での取り組みは非常に重要だと考えています。私は2008年から3年間、大阪市立大学医学部附属病院でプロジェクトを行いました。1年目は小児科外来の待ち合いの白い仮設壁に、子どもと一緒に図形パズルで絵を描きました。翌年は病院の屋上庭園に500ほどの風船を浮かべて風を見るようにしました。そして3年目は入院病棟の中央にある光庭に、霧を立ちこめと空から無数のシャボン玉を降らせる、「霧はれて光きたる春」というインスタレーション作品を

行いました。その作品の間は、患者・医師・看護師といった立場や役割の違いを越えて、病院中にいる人びとが窓辺に集まり、全員が空を見上げる人になります。風景を変え、病院という場所に対する想像力を広げる芸術。そんな「芸術」が病院での「文化」に変わっていけばと願っています。

#### 美術館の外でこそ芸術が必要

人は社会の規範や法律、経済、倫理などさまざまな要因に縛られて、自らの想像力を閉じてしまいがちです。この想像力を開くことを目指し「まなざしのデザイン」の取り組みを続けています。特に人の命を預かるような病院こそ、医療従事者や患者の方々の閉塞したまなざしを開きたいと願います。芸術鑑賞を目的とする美術館や劇場の外にも、実は芸術を必要としている人たちはいるではないでしょうか。病院や貧困、災害といった辛い現場でこそ、芸術が果たせる役割があるのではないかと考えています。

(2015年1月30日/場所=筑波大学芸術学系棟2階会議室)

# ミヤケンのアート・プロジェクト

## MIYAKEN Art Project

### ミヤザキ・ケンスケ [画家]

Kensuke Miyazaki  
[Painter]

画家として国内外で活躍する“ミヤケン”ことミヤザキケンスケ氏による、学生時代から現在に至るまでの活動の紹介。海外でアーティスト自らがアートプロジェクトを実行する実践者としての、生の声が聞かれた。またケニアのスラム街にある小学校で開催予定の壁画制作プロジェクトを再現し、ファンドレイジングの手法などを学んだ。

#### 絵を描くことで何かできないか

僕は学生時代は洋画コースでしたが、公共空間でパフォーマンスやインスタレーション、ライブペイントなどを行っていました。現在も壁画制作を続けるきっかけとなったのは、在学中あるテレビ番組をきっかけにフィリピンの児童養護施設に訪問した時のことです。そこで僕は壁に大きなドラゴンの絵を描いたところ子どもたちは大喜びしてくれました。美術のための美術ではなく、美術を通して社会と関わってきたいと考えていた僕は、その経験から「絵を描くことで社会に対して何かできないか」と思いました。以後、自らプロジェクトを企画しさまざまな場所で壁画を描いています。

#### ケニアでの壁画制作プロジェクト

大学院修了後に渡英し、その頃、テレビでケニアの首都ナイロビにあるスラム街を知りました。早速現地の日本人に連絡を取り、単身でケニアへ。そこで貧困に負けず必死で生きている子どもたちを目の当たりにし、彼らが通うマゴソスクー



#### みやざき・けんすけ

画家。1978年佐賀県生まれ。筑波大学修士課程芸術研究科修了。修了後イギリスへ渡りアーティスト活動を開始。国内外の各地でアートプロジェクトを行うほか、継続的にケニアのスラム街の小学校にて壁画制作による学習環境の改善と心の交流に取り組んでいる。主な展覧会・活動・作品にテレビ番組「熱中時間」「熱中スタジアム」スタジオ内壁画制作（NHK、2007-2010年）、「ピクニックあるいは回遊展」（熊本市現代美術館、2008年）、個展「Gift」（Jendela、エスプラネード、シンガポール、2013年）など。

ル（日本の小中学校に相当）にて壁画を制作しました。初めにドラゴンの絵を描いたら子どもたちは巨大な蛇を連想して怖がったので、ドラゴンを塗りつぶしライオンやバオバブの木に変更。すると子どもたちが明るい笑顔を見せたのです。土地に適應した絵を描くことが重要だと思い知らされました。

それからケニアとの交流が始まりました。それが4年に一度、ケニアでプロジェクトを行う「ケニア壁画プロジェクト」です。壁画制作のほかには日本とケニアの子どもに同じ題材で絵を描いてもらうワークショップなども行いました。

ですが2014年の12月、火事によってマゴソスクールの一部が焼失。親しかった現地の男性が亡くなり落胆しました。中止を悩んでいたところ「苦しいときこそ明るい絵を描いてほしい」と現地の人たちに背中を押されました。たくさんの方の協力のもと、2015年1月に3回目のプロジェクトを実行します。

（2015年1月8日／場所＝筑波大学芸術学系棟2階会議室）

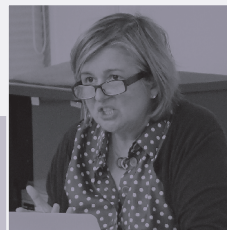
# 芸術と健康

## Designing for Health

日本語通訳:宮本恭子 Interpreter:Kyoko Miyamoto

### ブランウェン・ゲイリム [クリエイティブディレクター、ウィリスニューソン社]

Bronwen Gwillim  
[Creative Director of Willis Newson]



#### ブランウェン・ゲイリム

アーティスト、デザイナー、パブリックアートコンサルタント。ウィリスニューソン社クリエイティブディレクター。ビジュアルアーツオフィサー・エデュケーションオフィサーとしてサウス・ウエスト・アーツにて勤務後、現職。現在はイギリス・ブリストルに拠点を置きヘルスケア施設等にてアート、建築、環境デザインを手掛けるウィリスニューソン社にて、クリエイティブディレクターとして活動。アーティスト、デザイナー、アートコーディネーターとして15年以上医療施設や福祉施設などでアートプロジェクトに携わる。

イギリス・ブリストルにて アート&ヘルスケアを専門に扱う企業に属し、長年にわたり両者をつなぐ仕事を担ってきたブランウェン・ゲイリム氏。彼女がアートコーディネーターとして、またはアーティストやデザイナーとして病院や福祉施設にどのように関わってきたのだろうか。前半にはイギリスのアート&ヘルスケアの現代史も紹介された。

#### イギリスにおけるヘルスケアとアートの変遷

1980年代、貧富の差が拡大している時代に人びとを一つにする手段としてコミュニティアートが開花しました。1990年代にはウェルビーイング(Well Being)というコンセプトが目目され、各地域にヘルシーリビングセンターが設立されました。これは医師、カウンセラー、看護師がいて料理教室やコーラスなどのクラスもあり、メディカルセンター、アートスタジオ、コミュニティセンターとしての役割を果たしています。2000年代になると、NHS(国民保険サービス)は民間企業と提携して病院の建て替えを多数行いました。その際に芸術とデザインの重要性が認識され、芸術家が建築チームの一員として新しい病院で雇用されるようになりました。アートコーディネーターとして私も病院で働き、どのようにスタッフや患者が芸術や建築設計のプロセスに関わるかに対して情熱を傾けました。現在は医療を必要とする高齢者が増加し予防医療と健康管理への関心が増しています。そのため芸術家は、介護施設、メンタルヘルスセンターなどに仕事の機会を得ることになるかと思えます。

#### ウィリスニューソン社の活動

私が所属しているウィリスニューソン社とは、イギリスで芸術と健康を専門に扱っている機関です。より良いヘルスケア環境をつくり出すために芸術、インテリアデザイン、内装など建築を融合した創造的で実践的な取り組みを行っています。私たちは創作活動に参加することが健康に大きな違いをもたらすと確信しています。

最近では、補助療法、カウンセリング、情報アドバイスなどが受けられるがんセンターに対して、地元の風景や植物を描いた絵画、机の天板、カップ、スタッフのユニフォームなどを手掛けました。私の手掛けるプロジェクトの多くは、患者と一緒に取り組むことから始めています。患者とコミュニケーションを取り、言葉を越える共通言語を見つけるため創造的なワークショップセッションを運営しています。患者が何を重要だと考えているか、どうすれば彼らの地域にとってセンターが意味のあるものになるかを理解することが重要なのです。

(2014年11月4日/場所=筑波大学芸術学系棟2階会議室)

# アートセラピー入門

Art Therapy for Health

大久保シェリル [アート・セラピスト] Cheryl Lyn Okubo [Art Therapist]

栗本美百合 [臨床心理士] Sayuri Kurimoto [Clinical Psychotherapist]

レナン・ラスト [アート・セラピスト]

Lenan Rust [Art Therapist]

アートセラピーの専門家である3名の講師による講演とワークショップ。精神科医師や病院アートコーディネーターなどの受講者たちは、芸術と医療を融合させて行うアートセラピーのマネジメントを学んだ。ワークショップは、カラーティッシュペーパーを素材に自由な創作から動詞を導き、言葉を紡ぐもの。

## アートセラピーとは/イメージと無意識

アートセラピーとは、芸術、芸術教育、心理学という3つの領域が重なっています。その歴史は1920年代のアメリカで始まり、今では病院、学校、薬物依存症リハビリテーション施設、老人ホームなどで使われています。アートセラピーは心理療法の一形態であり、クライアントが作品(イメージ)を通じて自己表現(コミュニケーション)を行い、自分の奥(無意識の世界)にある自分に出会います。意識の世界でコミュニケーションは言葉で行われますが、無意識の世界ではイメージ(夢)を通じて行われます。カウンセリングとアートセラピーとの違いがここにあります。トラウマなど言葉で表現できない体験や複雑な感情も、イメージやモノをつくる作業であれば、内なる感情を解放してくれ、誰かとコミュニケーションを図ることができるからです。(大久保シェリル)

## 「芸術が治す」と「芸術で治す」

心理療法においては「セラピーとしてのアート」(芸術が治す)と「セラピーで使うアート」(芸術で治す)という2つがあります。その前者である「素材や創作プロセス自体が創作者に様々な影響を与えている」ことが私の大きなテーマです。身体感覚を用



おおくぼ・しゅり (右): ユング派アートセラピスト。アメリカアートセラピー協会公認アートセラピスト。アートセラピーを主題としたスペース「HEARTH (ハース)」(茨城県土浦市)を栗本と共同主宰。

くりもと・さゆり (中): 臨床心理士、学校心理士、心理学博士。高齢者施設で芸術療法士として働いた後、学校や小児科にて心理士として勤務。

れなん・らすと (左): アート・セラピスト。現在、アメリカ、ニューメキシコ州アルバカーキにあるセントラル・ニューメキシコ・レイブクライシスセンターに勤務している。

いる創作活動では、意識と無意識のコミュニケーションが自然になされると考えられます。作品づくりの中で、素材の質感や限界が身体感覚を通じて自分の内外の交流を可能にすると考えられ、その過程で生まれるイメージが大切です。(栗本美百合)

## サバイバー・グループのアートセラピー

性的トラウマなど深い心の傷を負うような出来事を生き抜いた人を「犠牲者」ではなく「サバイバー」と呼びます。私の行っているアートセラピーは、クライアントがづらいことから注意をそらすための手段ではなく、誰かが誰かを診断するものでもなく、個人の記憶や経験の隠れた意味を掘り起こすものでもありません。クライアントが自ら決めたゴールに向かえるよう支援することです。アートセラピーは、何かをしたいという意欲や何かをしていこうという積極性を回復させてくれますし、トラウマが原因で失っていた「自分の人生を生きる」という感覚を育み、今を生きる能力を回復するのに有効です。アートセラピーの一番素晴らしいところは好奇心や感動を取り戻させてくれるところです。(レナン・ラスト)

(2014年4月24日/場所=筑波大学芸術学系棟2階会議室)

# 手をつなぐ医療と芸術

## Caring and Art : Hand in Hand

### 齊藤泰嘉 [筑波大学芸術系教授]

Yasuyoshi Saito

[Professor, Faculty of Art and Design, University of Tsukuba]

つくば美術館学芸員が、2013年に筑波大学附属病院にて開催された日英シンポジウムを聴講したのをきっかけに企画した講座プログラム。地域社会に開いた美術館を目指す同館が、筑波大学芸術系の齊藤泰嘉により、筑波大学の病院でのアート活動とイギリスやオーストラリアの病院アートの事例が紹介された。

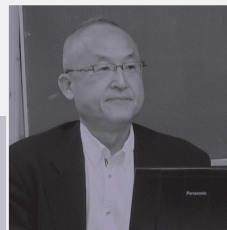
現在、筑波大学芸術系ギャラリーでは「芸術支援展 ケア×アートⅠ」を開催しています。筑波大学の授業から生まれた学生グループ・アスバラガスやパブリカによる附属病院での活動な

### 「手をつなぐ医療と芸術」を企画して

中泉多詔

(茨城県つくば美術館学芸員)

茨城県つくば美術館では、今年度、齊藤泰嘉氏に講師を依頼し美術講座を開催した。ここ数年、主として企画展にかかわる作家や作品の紹介等、オーソドックスな美術講座を開催しているが、地域に貢献する美術館を目指す上からも現在進行形の芸術活動のありようを多様な視点から紹介する必要性を感じていた。医療現場ひいては現代社会が直面する課題に対して、芸術がどのように対しうるのか、芸術の新たな可能性にかかわる医療現場での取り組みを紹介する今回の講座は、参加者だけでなく美術館にとっても、今後のあり方や活動を考えていく上で非常に有意義であったように思える。



### さいとう・やすよし

筑波大学芸術系教授（芸術支援、美術論、博物館学）。慶應義塾大学大学院修了。東京都現代美術館学芸員を経て筑波大学助教授。科研費研究（基盤C）「第三の美術展（コミュニティ型アートプロジェクト）による地域教育力の開発」。平成25、26年度文化庁助成[大学を活用した文化芸術推進事業]：「『適応的エキスパート』としてのアートマネジメント人材の育成——病院を活用した多様空間・異分野協働によるアートマネジメント能力の向上に向けて」事務局担当。おもな著書に『佐藤慶太郎伝——東京府美術館を建てた石炭の神様』。博士論文に「東京府美術館史の研究」など。

どを紹介していますが、学生の普段の笑顔をそのまま病院へ産地直送することが筑波スタイルとなっています。

また海外の例を紹介しましょう。昨年度訪問したイギリスのノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院には病院内に礼拝堂があり、その中庭に立つ樹をモチーフにした彫刻の足元には、聖パウロの教えが刻まれていました。その言葉は「愛・希望・信仰（LOVE, HOPE, FAITH）」です。またオーストラリアのメルボルン王立子ども病院では、救急外来に高さ約10mの巨大な水槽が、外来待合室にはミニアキョットのいる動物園があり、日本の病院との違いを認識しました。また今年は再びノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院へ行き、現地でもさまざまなワークショップを行いました。どれも好評で筑波スタイル、筑波スマイルがイギリスでも有効なことを認識いたしました。イギリスの病院は医療×芸術×信仰、オーストラリアの病院は医療×芸術×自然とそれぞれに文化的特徴がありますが、親切・感謝・笑顔は世界共通のケアなのではないでしょうか。

(2014年10月18日/場所=茨城県つくば市美術館2階講座室)

## 活動一覧表

### 「適応的エキスパート」としてのアートマネジメント人材の育成

— 病院を活用した多様空間・異分野協働によるアートマネジメント能力の向上に向けて —

1. 病院アート&デザインプログラム【演習】  
講座名：アート&デザインプロデュース ほか  
場 所：筑波大学、同附属病院、筑波メディカルセンター病院
2. アート&ガーデンセラピープログラム【演習・講義】  
講座名：環境デザイン特別演習、環境デザイン演習 ほか  
場 所：筑波大学、同附属病院
3. アートプロジェクトにおけるインターンシップ【演習・講義】  
講座名：美術論、美術論特講、美術論演習、芸術支援学 ほか  
場 所：筑波大学、茨城県つくば美術館 ほか

### 掲載媒体・広報実績

- 院内誌『はんなん』(発行=〈医〉杏和会 阪南病院、2014年5月号)  
「庭園療法&筑波大学コラボ ワークショップ『空ゴ布林』」
- ウェブマガジン『ステキナス研究所』(<http://www.kango-roo.com/sn/>)  
「『アートで病院を楽しくする』挑戦 筑波大学ホスピタルアート【前編】(2014年5月9日)  
「病院の空気をもっとおいしく!芸術学生が病院を変える 筑波大学ホスピタルアート【後編】(2014年5月10日)」
- 筑波大学附属病院ニュースレター「Lien Tsukuba」(発行=筑波大学附属病院、2014年7月号)  
「TSUKUBA ホスピタルアート『ホスピタルアートって?』」
- 地域情報誌『常陽リビング』(発行=常陽リビング社、2014年8月2日)  
「ガムテープで『妖精』作り 筑波大学附属病院で」
- 地域情報誌『つくばる』(発行=ユーコム つくまる事業部、2014年10月号)  
「筑波大学 芸術支援展 ケア×アート | 9/30(火)~11/9(日)」
- 『日本経済新聞』(発行=日本経済新聞社)  
「連載『キャンパス 新発見』=病院に芸術 ころろ和む空間=」(2014年10月20日 朝刊 23面)
- 筑波メディカルセンター広報紙『アプローチ』(発行=筑波メディカルセンター病院、2014年10月号)  
「ワークショップ『さくらゴ布林現る!』」
- 筑波大学附属病院ニュースレター『Lien Tsukuba』(発行=筑波大学附属病院、2014年11月号)  
「TSUKUBA ホスピタルアート『ハープクッキー&ティーを味わおう』」
- ウェブサイト『つくばエクスプレス沿線のまちづくり つくばスタイル』(URL= <http://www.tsukuba-style.jp/>)  
「秋代に輝くゆめ花火」(2014年11月20日)
- 『病院新聞』(発行=病院新聞社)  
「話題を追う『アートで医療支援活動』」(2014年12月11日 3面)
- 『常陽新聞』(発行=常陽新聞)  
「筑波大でゴ布林展」(2015年1月24日 朝刊 2面)
- 地域情報誌『常陽リビング』(発行=常陽リビング社、2015年1月24日)  
「創造性と達成感、子どもたちと共有 病院ゴ布林博士展」

ほか多数

事務局スタッフ=齊藤泰嘉(筑波大学芸術系教授)、鈴木雅和(同系教授)、貝島桃代(同系准教授)、  
岩田祐佳梨、小中大地、佐藤恵美(同系研究員)、井田まどか(同系齊藤泰嘉研究室事務補佐)



## ケア×アート いきいきホスピタル 2

平成26年度文化庁助成 [大学を活用した文化芸術推進事業] 筑波大学プログラム報告書  
「適応的エキスパート」としてのアートマネジメント人材の育成  
—病院を活用した多様空間・異分野協働によるアートマネジメント能力の向上に向けて—

BEYOND MUSEUMS : ARTS MANAGEMENT PROGRAMS IN MEDICAL ENVIRONMENT SUPPORTED BY ARTISTS, DESIGNERS AND CURATORS  
CARE×ART IKI IKI HOSPITAL 2

2015年3月31日発行

発行 = 筑波大学芸術系

〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL / FAX : 029-853-2856

編集 = 齊藤泰嘉、佐藤恵美、小中大地、岩田祐佳梨、井田まどか

編集協力 = 筑波大学附属病院、筑波メディカルセンター病院

デザイン = 有限会社キオイオフィス

イラスト = 小中大地

執筆 = アナグリウス ケイ子 (アナグリウス ケイ子 デザインオフィス) / エンマ・ジャーヴィス (ノーフォーク・アンド・ノーリッチ大学附属病院) /  
中泉多詔 (茨城県つくば美術館) / 長島明子、岩田祐佳梨 (筑波メディカルセンター病院) / 中村洋子 (筑波大学附属図書館) / 原尚人、  
三ヶ田愛子、羽田舞子、渡辺のり子 (以上、筑波大学附属病院) / 齊藤泰嘉、村上史明、ハーベス・リム・フォンデビリヤ、栗原史帆、  
高橋和佳奈、竹淵翔太、出口真帆 (以上、筑波大学)

印刷 = 株式会社イセブ

助成 = 文化庁 平成26年度大学を活用した文化芸術支援推進事業

Copyright©University of Tsukuba, 2015

All right reserved

Printed in Japan



